新宿バス放火事件の被害者の想い

作家杉原美津子さんが歩んだ道のり

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

「死刑でなくて、よかった」と答えた私。「なぜ」と聞かれた。
「生きて償ってほしい」と返した言葉にウソはなかった。
だがそのこと以上に、**死刑ではなかった判決に、自分自身が「生きる」ことを許されたように思えた。**

これは、1980年に起きた新宿駅バス放火事件で重傷の火傷を負い、その後も後遺症に苦しめられた杉原美津子さんが、加害者に無期懲役の判決が言い渡された際に口にした言葉です。
加害者は不幸な境遇から心を病み、錯乱した状態で新宿駅西口に停車中のバスにガソリンを撒き火をつけました。
その結果、杉原さんを含む14人の負傷者と6人の死者を出す大惨事となりました。
杉原さんは死の淵を巡りながらも奇跡的に命を取り留めました。

彼女は辛い治療と苦しいリハビリの中で自分がなぜ事件に巻き込まれたかを考え、加害者の生きてきた道を想像し、被害者である自らの心と加害者の心を重ねてみました。
加害者の男性は、父親の暴力により義務教育もろくに受けず社会に出ました。
30歳の時に結婚しますが、妻は精神疾患で入院してしまいます。
施設に預けた子供に欠かさず送金していましたが、やがて養育費が払えなくなり、絶望の中でこの暴挙に至りました。

事件当時、杉原さんも家族関係や私生活の問題で疲れ果て、自ら命を断ちたいと考えていました。
「彼も私も絶望の中を生きていたのだ…」と彼女はふと感じました。
加害者の感情は被害者には無縁のものです。
しかし**憎しみや怒りだけで終わらせたら、加害者が絶望して暴走した行為と同じではないか、絶望を共に乗り超えていくことに意味があるのではないか**、と彼女は考えるようになっていきました。

回復した後、杉原さんは加害者に「生きて償って下さい」という旨の手紙を書きました。
そして、面会も果たします。
その後彼女は自分の運命を背負いながら、生きる意味についての作品を書き続けました。
（『生きてみたい、もう一度』、『ふたたび、生きて、愛して、考えたこと』、他)
「世の中は、事件が起こると結果だけを見て〝こんな人間は死刑だ〟と簡単に言うけれど、それで事件は終わるわけじゃない。
残虐な行為が終わるわけじゃない。
切り捨てるんじゃなくて、この人はなぜそうしちゃったのかという痛みに対する想像力があれば、人間とは何か、生きるとは何かを考えられると思う」と彼女は述べています。

杉原さんは治療で使われた非加熱製剤によってC型肝炎に感染し、肝臓ガンを告知されて2014年にこの世を去りました。

最期まで被害者と加害者の立場を洞察して実直な言葉で表現した彼女の道のりは、被害者や加害者という形に囚われない自由な生き方の様に思われます。

（S.Y）